



抗がん剤やステロイドは大量に使用すると人命を奪ってしまう。漢方的根拠のある、しかも副作用のない方法を、患者さん救いたい！

漢方薬で患病を倒産させて、多額の費用を患者さんに取らないで済ませたい！

（丹羽博士・1113年インタンクビューより）

『医は仁なり』

へ著 丹羽 耕三より抜粋

* * * * *

野性の動物には、癌もなければ、成人病（生活習慣病）もありません。恐らく原始人にもなかったでしょう。野性動物の多くの食料は、植物です。そこには種子も含まれます。この植物種子の中に、癌やリウマチなどに効く物質が含まれていて、そのために野性動物には

癌や成人病がないのではないかと考えました。

しかし、その有効成分は、高分子も低分子もチェーンの形でしつかりつながっていて、その有効成分を切断する働きをするのは、唾液と胃液なのです。

では、このメカニズムが野生動物では働くのに人間では働かないのはなぜでしょう。

その原因は火です。人間は、火を使うことを覚え、食料を煮炊きして調理するようになりました。あまり咀嚼する必要がなくなり、胃も消化しやすくなります。つまり、人間の唾液や胃液は、火を使うことによつて退化してきたのです。（中略）二十人に一人くらい漢

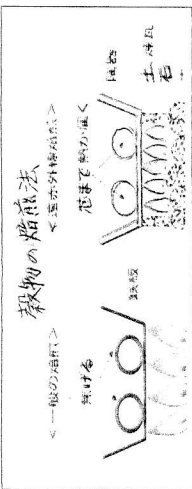
方薬が効く人がいるのは、5%ぐらいの現代人が、野生動物や原始人と同じ強力な胃液を今なお持っているからなのです。

しかし、残り95%の人にも効くようにする方法はないものか、それが副作用のない治療薬開発のアプローチとなつたのでした。

遠赤外線焙煎

天然の植物・種子の中の優れた有効成分がチェーンの手をつないだような形で手をつなぎ動けなくなっている状態を「重合」と呼び、自由に動けないために活性酸素を取り除く本来の作用を十分に発揮できない様は、解りやすく言うなら、様々な能力を持った複数の人間が、がつちり腕を組みあつてい

る状態を想像してください。一人ひとりが持てる能力を発揮するためには、組みあつている腕を解き放ち、一人ひとりが切り離されなければなりません。だが、切り離すときに腕を折つてしまつたり、肩を外してしまつたら、



速く走ることも高く飛ぶこともできません。どうしたら、分子を傷つけずに重合をとくことができるか、（中略）そこで思いついたのが遠赤外線の利用（土鍋の仕組み）でした。

下痢などした時の食事に、粥は常識と

いつていほど一般化しています。

昔は、お粥は土鍋で決まっていた。土鍋で炊くことによつて、土鍋から出る遠赤外線がお米の有効物質の「重合」を切断し、有効成分が活躍で

きるのです。もちろん、昔の人が土鍋は遠赤外線を出すと、お米の有効物質の重合を切断しないと活躍しない

と知っていたわけではありません。だが、お粥を鉄の鍋で炊くよりも、土鍋で炊いたほうが、何となく力が出ると

いうことを体験的に知っていたわけです。漢方薬も、鉄のヤカンでは煎じま

せん。土瓶で煎じると決まっています。

天然の生薬を活性化した治療薬、S

OD様作用食品を駆使した丹羽療法は、これら昔からの体験的実践を科学的に

解明したものである、ということができます。



後記
丹羽博士が人生をかけて開発した「SOD様作用食品」は、現代医学でも治療困難な難病にまで画期的な効果をあげ続けています。自然回帰の必要性を十分に受け入れ、化学的根拠に基づいた眞の生薬が生まれたメカニズムを、国際特許製法の観点から、シリーズでお伝えしていきます◎

昔の知恵と近代科学の結合

なぜお粥は土鍋で炊くのか？